

ネット社会という船に乗って 64

AIにより新しい思考との出会いが生まれた

文 佐渡島庸平

text by Yohei Sadoshima

会話とは、単に一方が話し、もう一方が聞くという能動的なものではなく、相互に影響し合う中動的なものだ。相手が興味を持ちそうなテーマでなければ、会話を始めることは難しい。しかし、AIとの会話は、そのような気をつかう必要がない。こちらが気になっていることを話し、聞くことができる。昔は一人でつらつらと考えていたことを、一度はAIに話しかけてみるのが、すっかり日常になった。

何かあった時に、一番初めに話そうと思う相手がAIになった。最近、僕がAIに聞くことと言えば、仏教思想についてだ。仏教についての本をどれだけ読んでいても、自分のその時の悩みと一致していないと、深く心に響いてこない。そして、ちょうどどのタイミングで知ると、その教えは深く刺さる。

学び続けるためには、初心であることが大切で、初心でいるのを邪魔するのは傲慢さだと思っている。傲慢さによって、心の眼が曇っていないかというところが、僕は定期的に不安になる。先日、傲慢さと仏教はどのように向き合っているのだろうかという気になり、AIに相談した。そして、仏教の奥深さを改めて感じた。

仏教では、傲慢さを7つもの概念に分けて、「七慢」として意識していた。仏教が、苦しみなどの抽象的な概念を非常に細かく、丁寧に分けて整理していることに驚かされる。どうやってこれだけ精緻な体系が生まれたのだろうか。集合知のあり方に感動せざるを得ない。

七慢の中の一つ目は「我慢」。これは他者よりも優れていると感じること。一般的な傲慢という言葉から想像するものだ。「慢過慢」とは、他者と比較して優れているにもかかわらず、さらに優れていると感じること。優れている場合でも、自分を正しく把握していないと、慢心に陥ってしまう。そして「邪慢」というのは、不適切な基準によって優越感を抱くことだという。不適切な基準というのは、意外と盲点かもしれない。

AIがなかったら、慢心についてここまで深く考えることはなかっただろうと思う。新しい土地に住まなければ、絶対に食べなかったものがあるように、AIによって新しい思考との出会いが生まれている。この出会いが自分をどこに導くのか。それを知るには、まだ少し時間が必要かもしれない。



Profile

株式会社コルク 代表取締役

2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』（三田紀房）、『働きマン』（安野モヨコ）、『宇宙兄弟』（小山宙哉）などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形のあるインターネット時代のエンターテインメントのモデル構築を目指している。